

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 7日現在

機関番号：12601  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21520811  
 研究課題名（和文） 体制転換期ネパールにおける政治言語の流通と変容に関する言語人類学的研究  
 研究課題名（英文） A Linguistic Anthropological Study on Distribution and transformation of Political Language in transitional Nepal  
 研究代表者  
 名和 克郎 (NAWA KATSUO)  
 東京大学・東洋文化研究所・准教授  
 研究者番号：30323637

研究成果の概要（和文）：極西部ネパールにおける人類学的調査に基づき、連邦民主共和国としての憲法制定に向けた体制転換期にあるネパールにおいて、政党や NGO、民族組織等の運動体が発する具体的なアジェンダが、「一般」の人々の生といかに接合し或いは齟齬をきたしているか、より具体的には、「先住民」「包摂」といった新たな用語がいかに広められ、理解あるいは誤解されていくかを、具体的な言語使用の水準にまで降り立って、同時代的に記録し分析した。

研究成果の概要（英文）：Based on anthropological fieldwork in Far-Western Nepal, I investigated how various agenda of Nepali political parties, NGOs, ethnic organizations and so on are connected, with various discrepancies and misconceptions, to the lives of “ordinary” people in Nepal in its transitional period toward a federal democratic republic. More specifically, I documented and analyzed, in the level of language use, how relatively new keywords such as “indigenous peoples” and “inclusion” have been propagated and (mis)understood.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民族学

キーワード：文化人類学 言語人類学 ネパール

1. 研究開始当初の背景

(1) ネパール情勢及びネパール研究の展開

世界唯一のヒンドゥー王国であったネパールは、10年にわたる実質上の内戦、2008年4月10日の制憲議会選挙を経て同年5月28日に連邦共和国となった。制憲議会は、当初2年以内に新たな憲法を作成すると規定されていた。その成否を含め状況は流動的であったが、2008年4月の選挙の時点で、「新

なネパール」への希望が広く人々の間に行き渡っていたことは、多くの人々の観察によっても、投票結果からも明らかである。

1990年の民主化を第一の契機、1996年に開始されたマオイスト勢力による「人民戦争」を第二の契機として大きく変容しつつあるネパールについては、①民族的、宗教的、地域的なまとまりを軸とした運動体の活動、②マオイストと軍・警察という二つの武装勢

力の間立たされた村人たちの採った様々に異なる行動、といった点について続々と人類学者等による研究成果やレポートが刊行されつつある。

こうした成果の後になされるべきは、①と②の間を埋める研究である。運動体の提示するアジェンダの多くは、**Democracy**、**Inclusion** といった「グローバル」に流通する概念に対応するネパール語の語彙自体が近年新たに作られ或いは置き換えられたものであることが端的に示すように、ネパールの多くの人々にとって出発点において外的なものである。他方、人々が行ったデモや投票の背後にあった「希望」の内実は、十分に分析されてこなかった。必ずしも精密コード的に分節化されていない広く行き渡り語られた希望と、それを実現するものとして登場してきた新たな語彙・問題系との接合が如何になされ、そこで如何なる齟齬が生じているかを具体的に明らかにし、そこから翻って人々の希望の多様な内実に迫っていく作業が、要請されている。

### (2) 言語人類学的知見の導入

以上のような作業は、言語を通常意味の体系として、また時に行為として扱う通常の折衷的な民族誌的手法では十分に行うことが出来ない。そこで本研究では、近年の北米言語人類学の展開、とりわけ **M. Silverstein** の議論を参照し、言語の指標性と象徴性、意味論的領域と語用論的領域、また言語による社会の構成と社会による言語の構成とを統合的に扱うことを目指す。具体的には、個々の発話を会話分析の手法で記録した上で、例えば、村にやってきた政党活動家の発した言葉の当の活動家が意図したであろう通常の意味での「意味」、その語用論的な諸効果、及びそれを聞いた人々の反応等を含む、**Silverstein** の用語法を用いれば、**entextualization** と **co(n)textualization** の過程を統合的に記述することが目指される。

### (3) これまでの研究成果との関係

本研究の実際の調査は、極西部ネパールのビヤンス及び周辺地域を故地とする人々の間で行う計画である。研究代表者は 1993 年以来行ってきた調査に基づき、これまでビヤンスの人々の社会範疇、儀礼、言語使用等について研究結果を発表してきた。そこで一つの焦点となってきたのは、当該の人々にとって本来外的であったものを自分達の文化的・社会的枠組の中に取り込むことによって生じる変容であった。本研究は、同一地域での更なる変化を捉えようとする点、また基本的な分析視角の共通性において、研究代表者の従来の研究の直接の延長線上に位置づけられるものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、極西部ネパールにおける人類学的フィールドワークに基づき、体制転換期ネパールにおける広義の政治言語の生成、流通、変容の布置の一例を、同時代的に記録し分析する試みである。多くのネパール国民が表明した「新しいネパール」への希望と、政党や NGO、民族組織等の運動体が発する具体的なアジェンダとが、新たな憲法が作られ新たな政治体制が動き出すであろう（と期待された）三年間に、いかに接合し或いは齟齬をきたし、いかなる方向に収斂していくのかを、特定の地方に焦点を当てて、言語使用の水準にまで降り立って具体的に明らかにすることが目標である。

## 3. 研究の方法

本研究計画の中核は、極西部ネパールにおける言語人類学的フィールドワークである。個々の会話の詳細な記録と分析から、「新しいネパール」に関する様々な語彙やメッセージを、誰が如何なる機会にどのような言語で語るのか、それがどのような人々にどの程度、どういう形で理解・誤解され、或いはされないのか、そうした個々のやり取りが累積していくことにより、人々の語り方がいかに変容していくのか、といったことを、具体的に明らかにすることを目指した。具体的な研究方法としては、通常文化人類学的な参与観察に加え、可能な限り村の広場等での会話を録音させていただき、それを会話分析の標準的なフォーマットで書き起こし、それらを基礎データとして言語人類学的な分析を加えるというやり方を採用した。理論面では、とりわけ北米言語人類学の研究成果を吸収し、それを分析に利用した。

本研究におけるフィールドでの言語人類学的調査を比較的短期間に行うためには、近年流通しつつある「新しいネパール」に関する様々な言説の展開を、語彙からレトリックに至る諸水準で前もってある程度明らかにしておく必要がある。そのため本研究では、上記現地調査に加え、ネパールで流通しているネパール語、英語、及び諸民族語の本、雑誌、パンフレットを蒐集し、それぞれの主張とそこで用いられている語彙、スタイル、レトリック等を、その通時的変遷も含めて分析した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

体制転換期ネパールにおける広義の政治言語の生成、流通、変容の布置の一例を同時代的に記録するという目標は、以下に具体的に記すように、ほぼ達成された。「希望」を巡る問題系について調査を十分に展開することは出来なかったが、これは、ネパールにおける政治過程の混乱と新憲法制定の遅れ

のために、「希望」という問題系自体が、当初の予測を超えて、急速に後景に退いてしまったためである。

本研究の中核をなす現地調査は、2010年に行った極西部ネパール、ダルチュラ郡でのものである。この調査では、通常の人類的な参与観察に加え、ビャンス出身者の民族団体であるビャンシー・ソウカ・サマージ等、ローカル NGO の主要成員やローカルレベルの政治家へのインタビューを行い、また演説等の映像・音声データを収集した。加えて、村及び郡レベルでの様々なインフォーマルな政治的折衝の場に立ち会うことが出来たため、具体的な政治過程の展開とそこでの政治言語の使用に関して、当初計画を越える貴重な情報を得ることが出来た。

またカトマンドゥ盆地では、ビャンス出身者に対する数次にわたるインタビューを行うことでダルチュラでの調査を補完すると共に、政治や包摂に関する各種セミナー等に出席し、また多様な運動体が刊行する国外では入手困難なネパール語及び英語の著書、雑誌、パンフレットを蒐集することにより、ネパール中央での政治言語の使用の最新の状況について知見を得た。

以上の現地調査と文献研究により、極西部ネパールの状況に関して具体的に明らかになったことの概要は、ほぼ以下の通りである。ビャンスの人々は、集会を開いて議論したり、演説し合ったりする伝統的な回路を持っているが、従来こうした場で用いられる演説の語彙や技法、論理をそのまま駆使するだけでは、現在彼らが直面している多様な問題に十全に対処することは出来ない。他方、ビャンスの政治家や NGO リーダーは、政治や援助、開発といった問題について、ネパール語でもビャンシー語でもほぼ同様に、常に最新の状況に即応し、外部の様々な存在と議論し交渉し対処する高い能力を備えている。むしろ問題が生じるとすれば、こうした問題について、ビャンスの人々内部で説明する場面である。ビャンシー語の発話において、所謂近代的語彙はネパール語乃至ヒンディー語の語彙をそのまま用いることが多く、さらにはそうした語彙の含意が急速に変化する場合があるために、国際的に、或いはネパールの中央で流通している議論を、そのまま文法的にビャンシー語に直すだけでは、多くの村人に理解可能な議論にはなり難いからである。こうした問題を回避するため、ビャンスの多くの政治家やリーダー達は、一般の人々に対して演説を行う際に、語彙、修辞、使用言語等様々な水準で、例えば伝統的な集会における演説の技法を取り入れ、また従来の説明枠組の中に新たな語彙を組みこむといった工夫を凝らし、ビャンス外部の人々との交渉とは異なった形で議論を展開する傾向がある。ただし

そうした試みは、常に十分に成功する訳ではなく、また結果として新たな概念や思考が人々の間に均等に広まっていく訳でもない。

例えば「先住民族（アーディバシー・ジャンジャーティ）」という語彙は、上記ビャンシー・ソウカ・サマージと、それを支持するネパール全体の官民の民族団体の働きかけもあって、21世紀に入ってから人々の間に急速に普及した。調査時点でビャンスの多くの人々は、自分達が「先住民族」の一つであると語り、時にそうしたスローガンを叫びつつデモ行進するようになっていた。こうした動きは、一方である種の民族文化復興運動と結びつき、また様々な援助を引き出すきっかけともなってきたが、それが人々の日常生活や儀礼実践自体のあり方に決定的な影響を与えている訳ではなく、この概念自体やこの概念に基づく主張に関する人々の理解にも、かなりのずれが見られた。他方、人々の側からも、様々な外部からの働きかけに対応して、新たな運動を行おうという様々な動きが見られるが、これを再び外部の枠組に接合していくのは、ローカルな政治家や NGO 活動家の仕事となっている。そこで再び、例えば「包摂」「先住民族」といった概念が、今度はより中心に近い人々に向けて、用いられることになる。

#### (2) 成果の国内外における位置づけ

政治的模索の続くネパールにおいて、中央と地方、政治家や運動家とそれぞれ特定の場で生きる「一般の」人々との間のずれとその架橋は、引き続き喫緊の課題の一つでありつづけている。このような考えに基づき、研究代表者は、純粹にアカデミックな議論の場のみならず、ネパールで開催された、政党や NGO 等からも多数参加者があるセミナーやシンポジウムにおいても、積極的に本研究の予備的な成果を発表してきた。そのうち複数のものが招待を受けての発表であったことは、本研究の試みが、既にネパール研究においてそれなりの評価を得ていることを示している。加えて本研究の成果の一部は、文化人類学、および（社会）言語学、南アジア研究といった枠組による内外の複数の学会、研究会で既に発表されている。

#### (3) 今後の展望

本研究課題の成果については、上記のように、既に主に英語による複数の学会発表を行っており、それらを順次論文としていくことが今後の第一の作業となる。また、本研究は極西部ネパールの特定の状況に焦点を当てたものであったが、そこで得られた知見をネパール国内の他の地域やセクター、また近隣諸国と比較する形で研究を展開させるべく、国立民族学博物館の共同研究「ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」を組織し、2011年10

月より3年半の予定で開始した。また、これに連動する形で、名和を代表者とする科学研究費基盤研究(B)、「体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」を申請し、内定通知を得ている。ネパールでは度重なる延長にもかかわらず制憲議会が憲法を制定できないまま解散となり、本報告執筆時点で今後の展開は不透明であるが、本研究課題の成果は、以上の共同研究を中心に、より広い文脈の中で、ネパール情勢の展開をも踏まえつつ、さらに発展させていく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 中上淳貴・名和克郎「ヒマラヤにおける伝承とその記録-「口承テキスト」研究と現地の文字化をめぐる」『明日の東洋学』22: 6-10、2010年 [査読なし]

[学会発表] (計8件)

- ① Katsuo Nawa, “Writing and Reading in ‘Mother Tongue’ without Orthography: Literacy, Tradition, and Byansi Texts”. The 17th Himalayan Language Symposium. September 6, 2011, Kobe City University of Foreign Studies.
- ② Katsuo Nawa, “Changing Aspects of ‘Politics’ in Byans, Far Western Nepal: Coping with the Panchayat System, Political Parties, Janajati Movements, and Maoists”. International Conference “Changing Dynamics of Nepali Society and Politics” organised by Alliance for Social Dialogue, Association for Nepal and Himalayan Studies, and Social Science Baha. August 18, 2011, The Shaknar Hotel, Kathmandu.
- ③ Katsuo Nawa, “Texts, Textuality, and the Emergence of Ethnographic Knowledge in the Local: The Case of Hindi and Nepali Texts by/on Rangs”. IUAES/AAS/ASAANZ Conference “Knowledge and Value in a Globalising World: Disentangling Dichotomies, Querying Unities”. July 5, 2011, The University of Western Australia, Perth.
- ④ 名和克郎「「政治」と「集まり」の間-体制変換期ネパールにおけるランの「公的」な語りの諸相」。日本文化人類学会第45回研究大会、2011年6月12日、法政大学
- ⑤ Katsuo Nawa, “Federalism, Ethnicity, and Inclusive Democracy for Small

Janajatis in the Periphery: Some Preliminary Remarks and the Case of the ‘Byansi’ (Rang)”. CNAS/ HiPeC International Seminar “Federalism for Inclusive Democracy”. March 16, 2011, Centre for Nepal and Asian Studies, Tribhuvan University, Kathmandu.

[図書] (計5件)

- ① 名和克郎、「チャングリヤール 達の百年-ネパール、ビヤンスにおける生業と生産の展開と変容」、松井健・野林厚志・名和克郎編、『生業と生産の社会的布置-グローバリゼーションの民族誌のために(国立民族学博物館論集 1)』、岩田書院、2012年、29-56 (全418ページ)
- ② 名和克郎、「ネパール領ビヤンスのランを巡る言語状況の変遷と文字使用」、砂野幸稔編『多言語主義再考-多言語状況の比較研究』、三元社、2012年、379-406
- ③ 名和克郎、「ヒマラヤ交易民から成功した先住民族へ-ランの「生業」と「生産」を巡って」、松井健・名和克郎・野林厚志編『グローバリゼーションと〈生きる世界〉-生業からみる人類学的現在』、昭和堂、2011年、97-134 (全477+xvページ)
- ④ 名和克郎、「ランの葬送儀礼における時空間の構成とその変化に関する試論」、西井涼子編『時間的人类学-情動・自然・社会空間』、世界思想社、2011年、358-382

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

名和 克郎 (NAWA KATSUO)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号: 30323637